

表 1-1 創設時のカリキュラムと教授陣 ( ) 内は 1 週時間数

		(甲) 児童保全科	(乙) 女工保全科
第一学年	全体必須科目	実践倫理(1) 麻生 正蔵 体 操(2)	
	部分必須科目	心理学(2) 松本亦太郎 国 語(2) 茅野雅子、大村嘉代 英語(3)	
	基 礎 科 目	生理学(2) 水井 潜 社 会 学(3) 綿貫哲雄 社会経済学(2) 高橋誠一郎 統 計 学(2) 22 回生 二階堂 23 回生以後、森数樹	
第二学年	全体必須科目	実践倫理(2) 麻生 正蔵 体 操(2) 白井規矩郎、高桑ハナ	
	部分必須科目	倫 理 学(2) 友枝 高彦 英 語(3)	
	基 礎 科 目	社会衛生(2) 水井 潜 社会心理学(3) 桑田 芳蔵 応用人類学(2) 綿貫 哲雄 憲法行政民法(2) 中村 進午	
第三学年	全体必須科目	実践倫理(2) 麻生 正蔵 体 操(2) 白井規矩郎、高桑ハナ	実践倫理(2) 麻生 正蔵 体 操(2) 白井規矩郎
	主専攻科目	社会倫理(2) 友枝 高彦 変態心理学(2) 小熊虎之助 社会問題(2) 社会事業の(2) 生江 孝之 発展及原理 綿貫 哲雄 産業の発展(2) 梶崎浅太郎 児童学(2)	社会倫理(2) 友枝 高彦 変態心理学(2) 小熊虎之助 社会問題(2) 社会事業の(2) 生江 孝之 発展及原理 綿貫 哲雄 産業の発展(2) 北岡 寿浩 工場法(2) 千輪 浩 青年女子の研究(2) 女子職業問題
第四学年	全体必須科目	実践倫理(2) 麻生 正蔵 体 操(2) 白井規矩郎、高桑ハナ	実践倫理(2) 麻生 正蔵 体 操(2) 白井規矩郎、高桑ハナ
	主専攻科目	児童保全事業概説(2) 生江 孝之 児童産科及看護法(2) 島 信 育 児 学(2) 島 信 母親擁護事業(2) 防貧救貧事業(2) 戸田 貞三 同化事業(2) 松田竹千代 遊戯娯楽問題(2) 社会事情調査法(2) 吉岡まつ子 個人調査実習 社会事業実習(6) 正田 淑子 欠陥児の研究及取扱(2) 小熊虎之助 不良少年少女問題(2) 家族問題(2) 林 恵海 家庭教育(2) 石田新太郎	女工の教育娯楽問題(2) 女工使用問題(2) 農村問題(2) 佐藤 寛次 同化事業(2) 松田竹千代 家族問題(2) 林 恵海 社会政策(2) 水井 亨三 防貧救貧事業(2) 戸田 貞三 社会事業の調査(2) 生江 孝之 婦人問題(2) 林 恵海 社会事業実習(6) 正田 淑子 労 資 問 題(2) 水井 亨

\*このほか各学年に自由選択科目が設けられている。

「創設時 [大正 10 年] のカリキュラムと教授陣は、表 1-1 のとおりである。

いづれも、新鮮で充実した講義に、学生は、目を輝かして参加したとのことである。特に、戸田貞三教授の救防貧問題では、貧困について、『それが、たとえ一%の人であっても当事者にとっては一〇〇%の問題であることを全ての

社会悪を考えると決して忘れるな』と述べられ、そのことは、強烈な印象として残ったと伝えられている。

講義は少人数で、教授、友人との交流も深いものであった。

就職先は、女工保全科の場合は、倉紡、鐘紡など紡績会社の寮監、東京市職業紹介所、協調会などであり、児童保全課の場合は、桜楓会託児所、公立託児所、東京府児童保護院、東京府社会事業協会、東京府隣保館、済生会医療社会事業部、国立聾啞学校、内務省職業紹介事務局などであった。また、指導員として、大槻たか氏が母校に残って、後輩の指導にあたり、大きな影響を与えた。

学部開設五年後には、社会事業学部長として、正田淑子先生が就任された。先生は、英文学科出身でなおコロンビア大学で社会学を学び、M・Aをとられ、帰国直後に就任された」（日本女子大学社会福祉学科八〇年史編纂委員会『社会福祉学科八〇年史』ドメス出版（2003年）42頁〔一番ヶ瀬康子執筆〕）。

「社会事業学部創設当初の学生たちは、日本でさらにアジアで初めての社会事業学部に、期待と夢をふくらませて、集まってきたことはいままでもない。

全国各地、北は北海道から南は台湾、しかも他の学部と異なって、すでに社会的経験（タイピスト、小学校教諭、事務員など）や人生経験が豊かな人びとが、改めてこの学部をめざしてきたのである。今日の社会人入学を、彷彿とさせるものがある。

日本で『最初』に発足した『社会事業学部』には、全国からさまざまな想いと期待に胸をふくらませ、六四名の学生が参集した。“新しい学問へのあこがれ”とともに“不幸な人のために”“方面委員の父の影響で”“恵まれない人たちへ献身したい”など、社会事業学部第一回卒業生は、若き日の自らの『決断』について、異口同音に語っている。

第一回生の入学動機への調査結果は、次のように記されている。

#### <社会事業学部を選んだ理由>

- 新しい学問へのあこがれ 一五
- 社会事業への情熱から。保育所をはじめたいと思って 一三
- 社会奉仕的な仕事がしたいため 一二
- 独立した生活を希む 四
- 教授陣の素晴らしさ 四
- 父のすすめ、兄が社会学を選考していた 三
- 型通りでない勉強が出来るように思った 二
- 先輩のすすめ、女学校の担任にすすめられて 二
- 友人が入っていた 二
- 両親が社会福祉施設で働いていた（経営） 三
- 深い理由なし 二
- 英文科に入りたかったが力足りず 二
- 社会、婦人問題に関心を持ったから 一
- 社会の一員として社会を知りたかったから 一
- 家政科は興味なく、社会科を選ぶ 一
- 女子商業学校出身のため、師範、家政科に入れなかった 一
- 無記入 五

（一九七二（昭和四七）年社会福祉学科研究室調査より）

もともと入学に際して、父母の反対にあった人も少なくなかった。調査によればほぼ四分の一の学生が何らかの反対を押し切って入学してきている。反対を押し切り強固にその初志を貫いて入学する人が少なくなかった点が注目される。

日本女子大学校社会事業学部のこと、大阪毎日新聞で知り、三年にわたって願書を取りつづけたが祖父の反対で実現できず、祖父没後ようやく実現でき入学したという人もいる。

卒業後、一回生はほとんどの人が就職し、創設の期待に応えた」（同 40 頁以下 [一番ヶ瀬康子執筆]）。

ところが昭和 4、5 年頃より、社会事業学部入学者は減少した。これを背景に、昭和六年のカリキュラムが改正され、女工保全科と児童保全科は統合された。新カリキュラムでは、1、2 学年で基礎科目を修得し、3、4 学年で選択制となり、おのおのの志望と指導によって専門に進むことになった。選択科目は、次の 5 種類に分類された。(1) 児童保全に志す者、(2) 女工保全に志す者、(3) 社会教育に志す者、(4) 中等教育志望者、(5) 社会改善に対する理解を主とする者。

更に昭和 8 年には、社会事業学部は廃止され、「家政学部三類」へと名称が変更された。この背景について、一番ヶ瀬康子は次のように述べている。

「一九二八（昭和三）年の三・一五事件、一九二九（昭和四）年の四・一六事件と左翼運動の高揚とともに、これに対する弾圧抗争も熾烈となっていた。左翼運動や思想問題に対して世人が敏感に反応するようになるとともに、本学部入学者も激減したのであった。このような状況は本学部のみならず、他大学の社会学部、社会事業学部などにも同様の現象がみられたのである。

これを裏づけるように、家政学部三類への名称変更とともに、学生数はいっきに増加した。一九三一（昭和六）年入学者六名、三二（昭和七）年入学者四名の少数から、家政学部三類への以降の三三（昭和八）年には一八名、三四（昭和九）年には四一名の学生が入学する状況になった。とくに三類への移行後、満州国、中華民国からの留学生が増加し、一九三三（昭和八）年入学者のうち二名を、また翌三四（昭和九）年には一四名の留学生を受け入れたのであった。これは、『本学部が三年生で終了することと、そして社会事業の理論と知識とを習得しえると同時に、家政学の素養と技術とが獲得されるという云はば一石二鳥の結果』（栄木三浦草稿）をもたらすことが歓迎される理由であった。

しかし、入学者は増加したが、中途退学者が多く、一九三五（昭和一〇）年入学者は五十余名、うち一三名が卒業（三五回）という状況もみられた」（前掲『社会福祉学科八〇年史』54 頁）。

この家政学部三類への移行により、カリキュラムも大きく変更された。しかし、社会事業学部時に開設されていたほとんどの講座は、講義クラスを減らすなどしつつも、そのまま継続されていたという（同 58 頁）。

その後、「家政学部家政科管理科」（昭和 19 年）、「家政科社会福祉科」（昭和 21 年）、「新制・家政学部社会福祉学科」（昭和 23 年）、「文学部社会福祉学科」（昭和 33 年）、人間社会学部社会福祉学科」（平成 2 年）となり、現在に至っている。